

下肢の変形矯正

座長：浜 西 千 秋・松 下 隆

会長が主題の一つとして選ばれたのが「下肢の変形矯正」である。先天性の変形や奇形はもとより、小児骨折の後遺症としての変形は小児のみならず思春期、成人に至るまで大きな治療対象として我々がかかわってゆかねばならない。特に下肢の変形は直ちに跛行など機能の障害として、あるいは歩容異常として現れるために親子ともに大きな悩みとなる。そして治療法も一時的矯正から単支柱式からテイラーフレームに至る創外固定器による漸次矯正まで、歴史的にも様々である。治療理念にも変遷はあり、例えば、今でこそ変形の高度な先天性下肢奇形であっても患肢の温存、奇形の矯正が当然と考えられているが、生後すぐに行うサイム切断が機能的にも「長期にわたる精神的ストレスから患児を守る」という観点からも優れていると考えられていた時代はそれほど昔のことではないし、今もその理念が全く否定されたということではない。我々は目先の変形矯正や外科医のプライドにこだわるあまり、手術侵襲や合併症によって直接患児を傷害する重大さはもとより、患児のこうむる長期の精神的負担やトラウマを等閑視してはならない。矯正を迫る親の気持ちではなく、子どもの気持ちと常に同感することがことのほか重要である。今回、演者として発表されたのはいずれも小児専門施設において長年変形矯正に携わってこられ、このような子どもたちの赤裸々な気持ちに同感してこられた先生方である。そのため矯正がうまくいって皆喜んでいといった類いの発表ではなく、変形矯正に伴う様々の失敗、合併症、そして後進が特に留意すべき点に触れていただいたと思う。すなわち大阪府立母子保健総合医療センターの川端秀彦先生は「先天性腓骨列欠損における下肢変形」、あいち小児保健医療総合センターの服部 義先生は「小児の下肢変形に対するイリザロフ創外固定器による矯正—下肢での矯正例の検討—」、星ヶ丘厚生年金病院の中瀬尚長先生は「成長障害に関連した下肢変形に対する骨延長術を用いた矯正術」、宮城県拓桃医療療育センターの高橋祐子先生は「当センターにおける下肢の変形矯正術の治療成績」を語られた。そしていずれも相応の達成結果だけではなく困難例、合併症、その発生リスクなどを明らかにされ、患児や医師が払わねばならない代償を警告された。また本パネルディスカッションにはソウル Guro Hospital の Hae R. Song 先生と M. Machavarapu 先生に加わっていただき、それぞれ「Bifocal tibial corrective osteotomy with lengthening in achondroplasia ; an analysis, results and complications」、 「Bilateral “hip reconstruction” in spondyloepiphyseal dysplasia congenita : an early experience」というタイトルで発表され、韓国で骨系統疾患に対しても極めて積極的に行われている手術体系を披露していただいた。